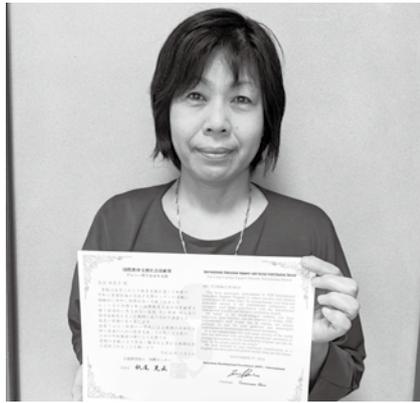


ゆみこ
落合 由美子さん
(長谷場町)



○プロフィール
佐野女性史研究会副会長
飲食店店主

キラリ★ 話題の「ひと」

ダルニー奨学金

情

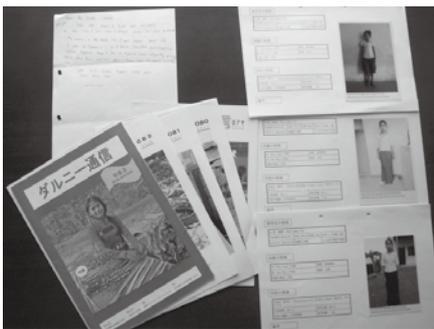
けは人の為ならず
「この言葉が最近では情けをかけてはいけないという意味に誤解されているが、本当は情けによって自分の心を豊かにする事です」と話してくれた落合さん。そんな彼女がお子さんの誕生を機に、新聞で目にした『ダルニー奨学金』に寄付を始めて29年。その功績により公益財団法人国際センターから表彰されました。ダルニー奨学金とは経済的貧困で中学校教育を受けられない子どもたちを支援する国際教育里親システムであり、1人の寄付者が1人の特定の子どもの教育費を出して、1対1で成長を見守る中学生の教育支援制度です。貧困するアジアの中学生の授業料、学用品、制服などに使われていきます。2020年5月現在までに約41万3600人以上の中学就学が実現し、2019年にはラオス、カンボジア、タイ、ミャンマー、ベトナムなどで、8千人以上の奨

学生に支援されました。

1人の子どもの中学校1年間の経費を約1万5千円で支援できるそうです。現在、落合さんはミャンマーの少年を支援しています。自身の2人のお子さんと同様に支援している彼を3人目の子と思っているそうです。「毎年送られてくる子どもの写真や手紙で成長を感じることが何よりも楽しみです」と話してくれました。

最後に、ほんの少しの情けを持ってアジアの子どもの手助けとなり、自分の心をも豊かにすると思うこの活動。興味を持つてくださる方が、1人でも増えることを願っているとのことでした。

(市民記者 葛貫郁子)



▲送られてきた子どもの写真や手紙

市長からの

メッセージ

昨年台風第19号による甚大な被害が発生してから1年が経ちました。被災された皆さんに対し心からお見舞い申し上げます。

この1年、市内はもとより全国各地から、多くのボランティアと多大なる寄付金や義援金そして物資など、さまざまな支援と励ましの声をいただき、大変心強く思うとともに、人の「絆」の温かさを感じました。改めまして深く感謝申し上げます。

また、秋山川では護岸工事や、立ち木伐採、堆積土砂の除去などの河川改修が順次行われている中、くしくも昨年の台風襲来からちょうど1年となる先日、台風第14号が発生しました。一時は関東地方へ上陸かとの予想もあり、昨年のような大雨を心配しましたが、進路が大きく反れたことで本市への影響もなく本当に安堵しました。しかしながら、今シーズンまだ台風の発生や上陸の可能性が無くなったわけではありません。引き続き備えを万全にしておいてください。

さて、新型コロナウイルス感染症については、先月本市で2つのクラスターが発生し、わずか半月ほどで77人もの感染者を出してしまいました。佐野市初の緊急事態宣言を発生しましたが、皆さんの冷静な対応と感染防止対策の徹底により、何とか感染者数を抑えることができました。ご協力ありがとうございました。

これから冬を迎え、新型コロナウイルスとインフルエンザ感染に備えるため、本市では県内初となる、市内2カ所目の地域外来検査センターを設置しました。引き続き皆さんには双方の感染防止に向け、うがい・手洗い・マスクの着用を徹底しながら「3つの密」の回避をお願いします。

これから、寒さが増してきますが、皆さんご自愛願います。

(10月15日 記)

岡部正英

今回の表紙 「仙波町に咲くそばの花」 令和2年10月2日撮影

そばの花が朝露で輝いています。新そばが楽しみな季節がやってきました。食欲の秋を楽しみましょう。





バケツ稲刈り体験

9月29日(火)、佐野市立あそ野学園義務教育学校の4年生による「バケツ稲刈り体験」と「はでかけ作業」が行われました。体験・作業は、当校の地域教育コーディネーターで、佐野市むらづくり推進協議会会長の横塚順一さんの協力のもと実施されました。稲は、6月9日に同校で実施された「バケツ稲植え体験」の際に植えられたものです。稲刈りまでの間、児童たちは水やりや、スズメ除けのキラキラしたテープを周囲に張るなどの世話をしながら、稲の成長を見守ってきました。



児童は、稲を持つ人と鎌で稲を切る人の2人1組に分かれ、稲刈りを体験した後、昔ながらの稲の干し方である「はでかけ作業」を行いました。

稲刈りを体験した中村優希菜さんは「横塚さんみたいにスッと稲が切れなくて難しかったけど、楽しかったです。ここまで稲が育ったのは、横塚さんや先生のおかげだと思います」と感想を語ってくれました。

あそ野学園義務教育学校の須藤誠治校長は「青々としていた稲が黄金色になりたくさんの稲穂をつけたように、子どもたち一人一人も成長できたと感じています。「稲刈り」と「はでかけ作業」を行っている子どもたちの表情は、とても嬉しそうでした。これからも、学校と地域が一体となって子どもたちの教育に取り組んでいきたいと考えます」と話されました。



佐野弁
ばんてい

転ぶ状態にはいろいろあるように、それを表す方言にもいろいろある

石などにつまずいて倒れることを、「転ぶ」とか「こける」などといいます。方言では普通、転ぶことをコロバル・コロガルといい、やや強めてオッコロガルともいいます。転ぶとはいうものの、そのときの状態にはいろいろあります。駆け足をしているときには勢いよく転ぶし、歩いているときには前のめりするように転びます。このように転ぶときの状態はさまざまです。転び方がいろいろあるように、そのようすを表現する方言にもいろいろあります。よそ見して歩いてたために転ぶということは、ごく普通にありうることで、方言ではこれをコロバル・コロガルなどといいます。では、その用例を挙げてみましょう。

「じやり道だけど石ところだらけだから、コロバって怪我なんかしネーように、セカズ（あわてない）にゆつくり歩いて行きなよ」

「じいちゃんが散歩中に、小石につまずいてオッコロガッタんだってさ。顔面がチダラマツカン（血だらけ）なっちゃッテねえ」

駆け足をしているときに、つまずいて勢いよく転ぶことがあります。そのようなときにはデンナガルといいます。これと同じ内容の方言に、デンゲル・デチナガルなどがあります。

「よそ見しながら走ってたんで、デンナガッてさあ、大けがしチャッタ」

デンゲル・デチナガルの「デン」や「デチ」は、接頭語的なはたらきをしています。そのために転ぶようすを強めています。

(市民記者 森下喜一)

